

【エントリー情報】

自治体名：熊本県宇城市

学校名：宇城市立豊野小学校

ご記入者：吉田沙也加

【設問】

① 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。（1,500 文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

小中一貫教育校である本校では、小・中共通で学校教育目標を「自他を尊重し、よりよく生きるための自己実現を主体的に目指す、人間性豊かな子どもの育成」と設定している。

学校教育目標の「自他を尊重」する子どもを育成するために、本校では人権教育を教育実践の根幹に据えている。学級活動や教科などの授業において、子ども同士が協働的な学びを行うことで、自他を尊重する姿へとつながると考える。また、「自己実現を主体的に目指す」子どもを育成するために、個別最適な学びを行う。子ども一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、自己実現を主体的に目指す姿へとつながると考える。

そのために、学習過程において、子ども自らが主体的に学び合い、学びを調整しながら学びを深め、よりよく生きるための資質・能力を獲得していく必要がある。主体的に学ぶためには、子どもの好奇心をくすぐり、自ら問いを発しなければならない。

本校では、確かな学力を構成する要素を、①学習意欲、②伝える力、③基礎学力、④読書習慣、⑤学習習慣、⑥授業づくりの6点としている。昨年度の2月に、子ども、保護者、教員を対象に行ったアンケートの結果では、小・中共通して、学習意欲に関して、子どもと教員の意識に差が見られる。教師から与えられた課題や指示を素直に取り組むことができるため、一見意欲が高く見えるが、自ら学ぼうとする意欲を子ども自身が感じていないためだと考えられる。また、中学校では、授業づくりに関する子どもと教員の意識に差が見られる。教員なりに教材や題材の工夫をしているが、子どもの実態や思いから少し離れている可能性がある。子ども自身が好奇心をもって主体的に学べるように、教材や題材への興味関心や協働的な学びを設定すること、そして、自らの学びを調整し深めるために個別最適な学びを設定することなど、授業を「子どもの学びの側」から再度考えることが必要である。そのため、ICT 機器を効果的に活用し、授業改善を図りながら、確かな学力の育成に取り組んでいくことにした。

そこで、2023 年度の研究主題を「好奇心からはじまる主体的な学びの創造」とし、研究を進めてきた。

好奇心とは、自分が知らないことや面白いことに興味・関心を寄せる心（学びの意欲）である。興味・関心を寄せたものをより知ろうと行動することで、新しい物事に触れ、新しい自分に触れ、よりよく生きることへつながっていく。「熊本の学び推進プラン」では、子どもの“わくわく”という好奇心が連続する単元デザインの工夫が、授業づくりのポイントの1つとして挙げられている。そのため、本校では好奇心を学びのスタートと位置付ける。

また、「熊本の学び推進プラン」では、授業改善の重点1として、子どもの“わくわく”が連続し、“わかった”“できた”“もっとやってみよう”が生まれる授業を目指すこととしている。そこで、主体的な学びは、子どもの“わくわく”という学びの意欲（好奇心）が連続し、“やってみよう”という学びの挑戦が生まれ、“なるほど”と学びが深まり、“わかった”という学びの実感が得られる学習過程で実現すると考える。これには、「協働的な学び」と「個別最適な学び」が必要不可欠である。

つまり、小・中学校の教員がこれまでに培ってきた知識や技能などを生かし、「協働的な学び」と「個別最適な学び」を実施するために ICT の活用技能の習得を目指すことで、好奇心からはじまる主体的な学びを創造していく。そうすること

で、よりよく生きるための主体性をもった子どもを育成したいと考えた。

② 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦労を教えてください。（1,500文字以内）

目標達成に向けて、次のように3つの仮説を立てて取り組みを行った。

- 仮説1** 教員の個に応じた、教員自身が協働的に学びながら授業の様々な場面における ICT の活用技能の習得を目指すことで、指導力の向上につながる。
- 仮説2** 教員一人ひとりの強みを生かした小中合同の職員研修などを行うことで、小中一貫教育校としての取り組みが推進され、指導力の広がりにつながる。
- 仮説3** 仮説1、仮説2の実践により、子どもの好奇心が高まり、学びに向かう主体性を育成することができる。

具体的な実践事項としては、以下の表のように取り組みを行ってきた。

	ICT 課題別研修	ICT 授業実践	実践発表会
研究内容	教員の ICT の活用技能向上 一人ひとりの課題に応じて	ICT を活用した授業実践 主体的な授業を目指して	ICT を活用した実践発表 実践のふり返りと展望
具体的実践事項	○Microsoft office ソフトについて ○ミライシードアプリについて	○学びの意欲、学びの挑戦、 学びの深化、学びの実感の 4つの視点での授業実践 ○協働的・個別最適な学びを 進める ICT の活用	○課題の発見と今後の目標の 設定
	学習共通実践事項の実施・学びを支える学習環境の整備		
検証方法	○児童生徒及び教員を対象としたアンケート調査 ○授業観察 ○全国学力・学習状況調査 ○熊本県学力・学習状況調査 ○単元テスト及び定期テスト		

○学習共通実践事項

学力充実のためのインフラ整備として、小中全体で学習規律の共通理解を図った。「チャイムで始まり、チャイムで終わる」「始まりのチャイムは、自分の席で聞く」など、主に小学校での共通実践事項を確認した。その上で、中学校でどのように取り組んでいくかを、ホップ・ステップ・ジャンプのブロック別に話し合い、9年間を見通して実践に取り組んでいくこととした。

「学力向上」のための学習訓練	○チャイムで始め、チャイムで終わる
	・ 始まりのチャイムの音は、自分の席に座って聞く。
	・ チャイムの合図で終わる(チャイム後は、児童は集中力が落ちる)。
	※ たどえ、早く終わっても教室から出さない(席かの学級の迷惑になる)。
○書くもの(ノートやプリント等)は、体の正面に置いて書く(位置の指導)。	
○右手は正しく鉛筆を持ち、左手は書くもの(ノートやプリント等)をきちんと押さえる。	
●筆箱の中身は	
・ えんぴつ(5~6本)家でといて来る(休み時間にとぐ)。	
(シャープペンシルやロケット鉛筆、ミニ鉛筆は不可)	
・ 赤鉛筆(赤ペン)、青鉛筆(青ペン)、名前ペン	
・ じょうぎ(2つ折りのじょうぎは不可)	

○ICT 課題別研修

多くの教員がそれぞれに ICT を活用した授業を実践している。しかし、それぞれの教員が抱えている課題は異なることに難しさがある。そこで、教員にアンケートを実施し、授業で活用できるソフトを中心に、課題別研修を実施した。第 1 回目を **MicrosoftOffice** 系で 3 コース、第 2・3 回目を **ミライシード** 系で 3 コースとし、教員が自分の課題に合わせてコースを選択することができるようにした。それぞれのコースには、授業でよく活用している教員や情報教育担当が講師となり、教員役・子ども役など、ソフトの特性に合わせて研修を実施した。



思っていたよりも多くの機能があることがわかり、「便利だ」「使ってみよう」など、今後の授業で活用しようとする意欲が高まっていた。実際にソフトやアプリを操作してみることで「難しいことではない」と実感できた様子だった。

○ICT 授業実践に向けて

共通実践事項の確認や ICT 課題別研修を受けて、9～11 月で実践する、ICT 活用計画の作成に取りかかった。従来であれば、指導案を立て、事前検討会・研究授業・事後検討会の流れをとっていたが、今回はすべての授業を行う教員が ICT 活用計画を作成した。作成に向けて、まず、ホップ・ステップ・ジャンプ部会に分かれて自分がどのような授業をしたいかを紹介し合うとともに、活用を迷っている教員の相談会を行った。その後、活用計画を作成した。

活用計画をもとに、各々の教員が教務や研究主任を通して授業実践日を全体に周知し、互いの実践を自由に参観し合うことができるようにした。授業を自習にすることなく、教員が学びたい授業を学びたいときに、学ぶことができるようにした。

ICT 活用のデザインフォーム R5.08.30 研究部

★ICT を使う **目的を明確にして** 活用する計画を立ててみましょう！（気楽に大丈夫です！）
 ⇒子どもたちが好奇心をもって、主体的・協働的な学びを実感させるためには？

- ・なぜ、その場面で ICT を活用しようと思ったか。
- ・なぜ、その機能を選んだのか。
- ・その結果、子どもたちに、どのような姿になってほしい？

教科・内容：〔 国語 〕科 学習時期：10月下旬

単元名・題材名：〔 文を作ろう 〕 導入・展開・終末

この場面 × この機能 で、期待したい子どもの姿は？

この場面

- ① 言葉集め
- ② 言葉ならべ
- ③ 文づくり
- ④ 発表

この機能

オクリンク

↓

期待したい子どもの姿は？

- ・言葉を分類したり、並べかえて文を作ったりする際に、意欲的に取り組むことができる。
- ・作った文をクラスで共有し、正しく言葉を並べることができているかお互いに確認する。
- ・ICT で成功体験を重ねることで、自分で文を書いてみようという気持ちを持つことができる。
- ・観察日記や絵日記等で、自分から書いてみようという気持ちを持つことができる。

○実践発表会に向けて

すべての教員が授業を実践し終わった 12 月の校内研修では、ICT 活用計画を振り返った。また、それぞれの実践を①「**わくわく**」と主体性を高める学びの工夫、②「**やってみよう**」と挑戦が生まれる学びの工夫、③「**なるほど**」と深化を図る学びの工夫、④「**わかった**」と実感が得られる学びの工夫の 4 つの授業改善の視点に沿ってまとめを行った。2 月の実践発表会では、まとめを基にそれぞれの実践を共有し合い、今年度の取り組みのまとめを行う予定である。

「やってみよう」と挑戦が生まれる学びの工夫

1 年算数科 単元名「かたちあそび」 展開 やってみよう!



- ・空き箱や空き缶などを使って電車や動物などを作ろうという活動を通して、箱など身の回りの具体物の概形や特徴、機能をとらえるために、タブレットのカメラ機能を活用した授業を行った。
- ・自分が作ったものを写真で撮り記録に残すことで、いいものを作りたい、次は何を作ろうと意欲を持つことができた。また、みんなに紹介したり見たりすることでいろいろな作品に触れることができた。しかし、何をどんな工夫をしたのかは実物を見たほうが分かりやすく写真の扱いに工夫が必要である。

③ (3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。(2,000 文字以内)

昨年度は、個人の実践をもとにミライシードアワードの応募を行った。昨年度の受賞をきっかけに、学校としての研究の在り方を見つめ直し、全職員の ICT 活用に対する取り組みをどうすべきかを考え、今年度取り組んできたところである。

(3-2) で示すデータや、各校内研修の反省より、今年度の成果 (○) と課題 (▲) について次にまとめる。

(1) 仮説 1 について

○ICT 課題別研修を複数回実施することで、各々の教員のニーズに合わせて研修を行うことができた。また、研修したことを生かして、各々が実践を行い、子どもたちが考えを表現し伝えたり、相手の考えを受け取ったりするツールとして、ICT 機器は効果的だという手ごたえを感じる事ができた。

▲今までなかなか活用ができていなかった教員、新しい活用の仕方を見いだそうとした教員など、各々に使ってみることで、適切な場面とそうでない場面があることが少しずつ明確になってきた。

(2) 仮説 2 について

○熊本の学びステップアップ研修や ICT 活用に向けた研修など、小中合同の職員研修を実施することで、校種・教科の垣根を越えて様々な教員の取り組みや考えに触れ、活用の広がりを感じる事ができた。

▲義務教育 9 年間の足並みをそろえているつもりであったが、共通学習実践事項など、学年ブロックごとの目指す子ども像を明確にし、どのような取り組みをするのか検討事項が見えてきた。

(3) 仮説 3 について

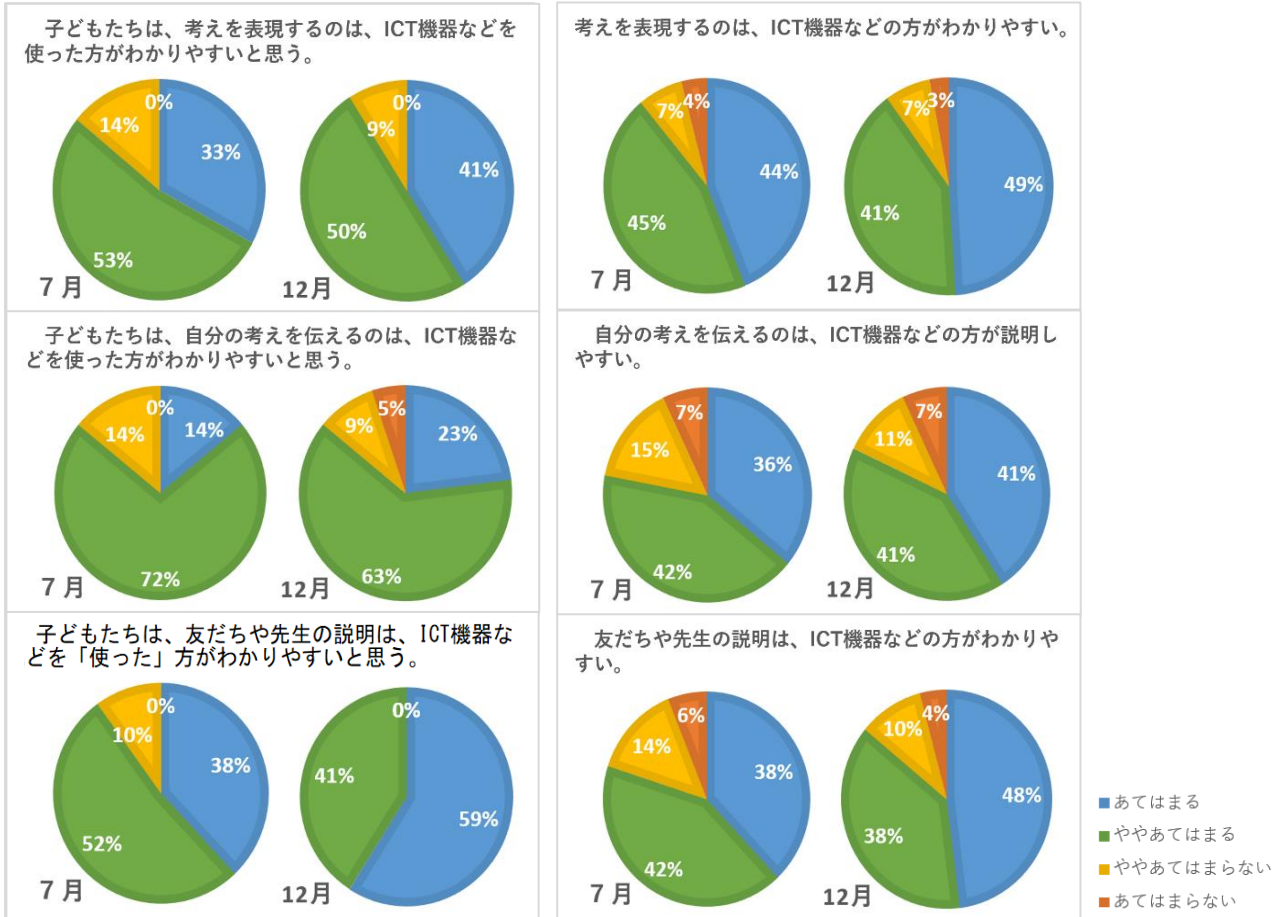
○それぞれの教員が ICT 活用した指導力が向上し、授業内での子どもたちの表現する手段が増え、主体的な学習へとつながった。

▲対面でのコミュニケーションに課題が出てきている。タブレット上のコミュニケーションにとどまらず、直接意見を交流するためのツールとして、子ども自身が活用できるようにする必要がある。

研究部では、まず職員を誰一人取り残すことなく ICT 活用技能習得することを目指し、「一人の 10 歩よりも、全員の 1 歩」を合言葉に、実際に授業で活用することにつなげていきたいと意識を変えることができた。そして、一人ひとりの職員が活躍できるようにと、ICT 課題別研修では、誰から何を学びたいかアンケートを取り、教員の中から講師を選出し、トップダウンではなく、教員と一緒に研究をしていくという意識で取り組みを進めることができた。この研究に対する意識が、校内研修を通して、今度は授業に対する意識となり、子どもたちに還元することができた。特に 9～11 月の ICT 授業実践期間は、職員室でミライシードを中心としたさまざまなシステムやアプリの情報交換がなされていた。ICT 活用が堪能な教員は、さまざまな新しい活用法を見だし、「苦手だ」「難しい」と少し引いていた教員も、「できないかもしれないけれど、やってみよう」という意識を持つことができ、研究部が目指していた全員の 1 歩に、そして教員が楽しいと思える授業に 1 歩近づいたと感じている。また、(3-2) で示すアンケート結果から、考えを表現したり、受け取ったりするツールとして ICT 機器は有効であることが見えてきている。しかし、考えを伝えるツールとしては、数値の大きな変化がなく、活用の仕方として工夫がさらに必要なことがわかってきた。教員の活用が増えたからこそ、メリットとデメリットの両方が見えるようになってきている。来年度も ICT の活用を促進していくなかで、課題を改善させていきたい。

(3-2) ICT 活用による成果について、定量的なデータでお示し可能なデータがあれば、教えてください。(1,500文字以内文字以内) ※本設問のみ任意回答

7月と12月に授業を行う教員(22名)と子どもたち(小中学生207名)に、学習に関する意識調査を行った。その中で、ICTに関する項目を抜粋する。



学習に関する意識調査の結果 [ICTに関する項目を抜粋] (左: 教員 右: 子ども)

(1) 教員

「子どもたちは、考えを表現するのは、ICT 機器などを使った方がわかりやすいと思う」の項目は、あてはまる・ややあてはまるが5%増加した。「子どもたちは、自分の考えを伝えるのは、ICT 機器などを使った方がわかりやすいと思う」の項目は、あてはまるの割合が9%増加した。また、「子どもたちは、友だちや先生の説明は、ICT 機器などを使った方がわかりやすいと思う」の項目の伸びは顕著で、あてはまる・ややあてはまるが12月で100%となった。考えを表現するツールとしては効果があると感じているが、考えを伝えるツールとしては、あてはまる・ややあてはまるの数値に増減はないうえに、あてはまらないが5%増加した。

(2) 子ども

「考えを表現するのは、ICT 機器などの方がわかりやすい」の項目は、あてはまる・ややあてはまるを合わせた増減はないが、あてはまるは5%増加した。「自分の考えを伝えるのは、ICT 機器などの方が説明しやすい」の項目は、あてはまる・ややあてはまるの割合が5%増加した。「友だちや先生の説明は、ICT 機器などの方がわかりやすい」の項目は、あてはまる・ややあてはまるの割合が6%増加した。ICT 機器に関する項目で、肯定的な回答が増えている。これらは教師の回答とリンクしている。

④ お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立った場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1つのエピソードに絞る必要はございません。(2,000文字以内)

(1) 「わくわく」と主体性を高める学びの工夫

① 小学校3年 体育科「幅跳び」導入

初めて試技をした時に感じたことを言語化したり、お手本と比較してちがいを見いだしたりできるように、実際の映像を確認しながら[オクリンク](#)上のカードにまとめられるようにした。また、授業の中では、自分の試技を逐一確認できるように、タイムシフト機能を使用した。

お手本として、高学年子どもの試技を見せたことにより、憧れを持って取り組むことができた。単元導入時の各自の気づきがその後の展開にもつなげられ、子どもは、踏切や助走、着地姿勢など目的を持って練習することができた。教師の取り組みとしては、意識的に気づきを共有する時間や場を設ける必要がある。



② すいしょう2A (情緒2年) 算数「さんかくやしかくのかたちをしらべよう」導入

図形の理解を促そうと考え、[オクリンク内のデジタル教材](#)を用いた学習を行った。

前時に教師用デジタル教科書を使用して、互いの考えを紹介し合う活動を行ったが、交代制で待ち時間があり、十分に満足できなかった。しかし、デジタル教材を用いたことで、個々のペースで学習することができ、意欲的に学習をすることができた。

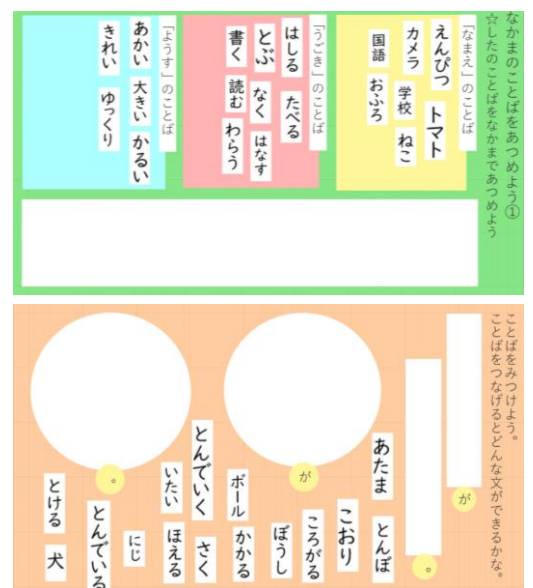


(2) 「やってみよう」と挑戦が生まれる学びの工夫

① すいしょう1A (知的2・3年) 国語「文を作ろう」導入

日記や作文を書く時に、言葉が固定化している子どもたちに、語彙や表現方法を増やし、文を書くことへの抵抗を軽減したいと考え、[オクリンク](#)を使い、言葉の分類、言葉を組み合わせる文作りを計画した。

オクリンクを使うことで、一人ひとりの学習が確保され、子どもたちの意欲は高まった。繰り返し取り組むことで、自力で文が書けるようになると期待できる。



② 中学校2年 数学科「図形の性質と証明」展開

三角形が合同であることや対応する線分が等しくなることを証明していく学習で**オクリンク**を活用した。何をすればよいかのわからない子どもや論理的に考えること、記述することが苦手な子どもが多数おり、思考ツールとして活用できるのではないかと考えた。

情報が絞られているので、何をすべきかが明確になり、自発的に取り組む姿が見られた。しかし、単に並べ替えの問題となってしまう、学習内容の定着に課題を感じた。難易度別のカードを作成し、子ども自身で自分に合ったカードを選択できる力を育てる必要がある。

【証明】 仮定より $\triangle APO$ と $\triangle BQO$ において
 合同な図形では対応する辺の長さは等しいので ①、②、③より
 $AO = BO$
 対頂角は等しいので $\angle AOP = \angle BOQ$
 平行線の錯角は等しいので $\angle PAO = \angle QBO$
 $\triangle APO \cong \triangle BQO$
 $AP = BQ$

【証明】 $\triangle APO$ と $\triangle BQO$ において
 仮定より $AO = BO$...①
 平行線の錯角は等しいので $\angle PAB = \angle QBA$...②
 対頂角は等しいので $\angle AOP = \angle BOQ$...③
 ①、②、③より
 1組の辺とその両端の角がそれぞれ等しいので
 $\triangle APO \cong \triangle BQO$
 合同な図形では対応する辺の長さは等しいので $AP = BQ$

(3) 「なるほど」と深化を図る学びの工夫

① 小学校5年 算数科「図形の角を調べよう」展開・終末

四角形の内角の和を求める方法を考える場面で、友達の解き方を見たり意見を交換したりしながら「三角形」に「分ける」ことに気づいていく姿を目指し、**オクリンク**の相互送信機能を活用した。

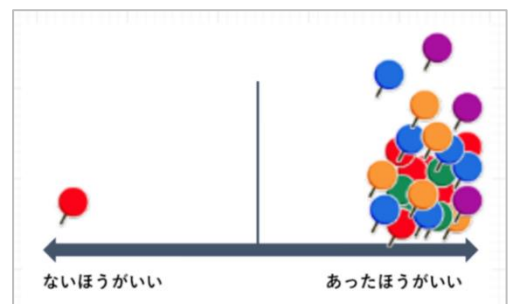
解いたものを送り合うことで、互いの意見を共有できた。手元に、友達の考えが送られてくるので、視覚的にもわかりやすかった。しかし、意見交流の際にタブレットの内容の発表だけになってしまい、考えを深めることに至らなかった。話し合いの視点を明確にする必要があった。



② 中学校1年 道徳「あったほうがいい？」導入・展開

ゴミ問題について考える入り口として、「ゴミ箱設置の是非」について自分の意見を**ムーブノート**のスタンプで示す活動を取り入れた。

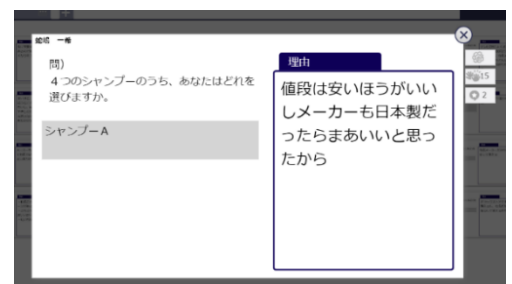
子どもは関心を持って取り組み、自分の判断で意見を定めるだけでなく、なぜそのように決めたのか理由を考えることができていた。意見が大きく分かれたことに驚き、反対の意見の理由についても具体例を含めて考えることができた。しかし、考えが進まない子どももいた。



③ 中学校2年 技術・家庭「私たちの消費生活」展開

ムーブノートの機能を使って、自分に合うシャンプーはどれなのかを考え、選んだ理由を添えてシートに記入し、広場へ送ることで全員の考えを確認できるようにした。

子どもたちがタブレットの操作に慣れていないため、スムーズに取り組むことができた。また、自分と同じ意見・違う意見の両方をすぐに確認することができ、比較がしやすかった。



(4) 「**わかった**」と実感が得られる学びの工夫

① 小学校4年 理科「わたしたちの体と運動」 終末

動物にも人と同じように骨や筋肉があることを学ぶために、Zoomと**オクリンク**を活用した大牟田市動物園との遠隔授業を行った。興味のある動物について調べる活動も取り入れ、専門家から評価をもらうことで、学びを実感させることをねらった。

複数回にわたって、専門家と学習をすることで、子どもたちの好奇心を保ち続けることができた。また、専門家による評価をもらうことで、学びを実感することにつながった。

